父の名・母の文字

札幌市医師会
札幌北クリニック　大平　整爾

わが家の子供たちが大学生で家を離れていた時期、家内は折に触れて彼らに手紙や小包みを送っていた。今は大学を出て独立し、こんなことも少なくなり手間が省けると言いながら少しは淋しい思いでいるのかもしれない。季節に応じて食べ物や衣服などを送ったり、また特別な行事でもある折には現金を書留で送金することもあったようだ。母親は有り難いものだと子供たちが真実感じるのは恐らく自分に子供が授かってからのことであろうから、家内もそれほどに礼状や電話を期待していなかったふしがある。

差出人が私（父）の名前であるのは大抵は物や現金を送る時で、「わが家の大黒柱はお父さんで、そのお陰でこうしてこれを送れるのですよ」という謎かけを子供たちにしていたものか、彼女自身が旦那の稼ぎで送れることを私に暗に感謝していたのかもしれない。いささか、考えすぎなのかもしれないが。

私自身は北大に入学したその年の6月に母を失っていたが、今思い返すと姉や妹が亡き父の名前を書いていろいろな物を下宿先に送ってくれていたような記憶がある。あの当時はこんなことを別段どうということなく、見過ごしていた。心のどこかで姉や妹そして父親に感謝していたのであろうが、それは意識下のことであった。わが家の子供たちにしても同様なことであろうし、その方が家族内の出来事として自然な成り行きであろう。いつの日か母親が自分にしてくれた諸々の心遣いに思いを馳せて感謝の情を新たにし、その陰に父親がいたことを或いは感じ取る時が来るのかもしれない。学会で東京に出向いた折に、ある新聞の学芸欄を読んでいて出くわした俳句が、「新米のとどくや・父の名・母の文字」であった。この句を詠んだ人がどの位の年代の人か分からないが、いみじくも同じように感じる人がいるものだと驚いてしまった。

父の名・母の文字ーひとの心の襞の微妙さを実に巧妙に表現しているものだと感じ入ったのである。忙しいということになっている今の世の中、手紙ことに直筆の手紙のやり取りは極端に少なくなった。文字が喜びに踊っている大学合格や結婚を知らせる手紙、悲しみを表すように頼りなげで涙の滲む文字の悲報、丁寧に丁寧に書かれた依頼状など、随分とたくさんを頂戴したものだった。自分への宛名書きの文字を見ただけで、これは誰からと分かる親しい友人連の手紙もあった。これは達筆、悪筆は関係がない。これ等の手紙類はまことに貴重に思える昨今である。最近では、圧倒的にワープロ・パソコンで印字された手紙が多い。

かく申す私自身も印字派なのだが、せめてもと署名だけは直筆を心掛けている。そしてさらに、手紙はE-mailに取って代わられた。確かにこの便利さを一度味わうと、これなしには仕事ができなくなる。ただ、文字には正直言って上手下手はあるものだが、文字は気持ちを伝える手段であるだけではなく、その書かれた文字そのものが書き手の感情を如実に表しているように思えるのである。

母親が父親の名前を書いて子らに何かを送る、受け取った子らがそれを見て、その時かその後にか何かを感ずるものではないか。数々の便利さに埋もれて、何か大切なものを知らず知らずのうちに失っていっていることを懸念するのである。

人名は難しい
その9：P.Pottの受難

小樽市医師会
澁谷整形外科クリニック　澁谷　昭雄

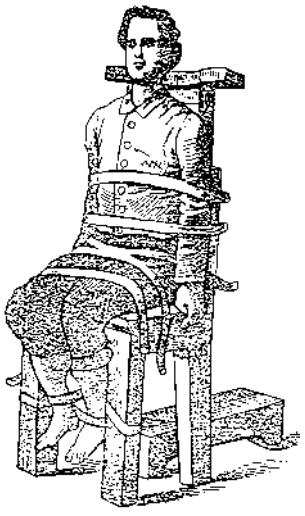
Ⅰ．P.Pottの受傷と経過

Percival Pottは、1756年1月中旬、大LondonのSouthwark区〔Guy（Educational）Hospitalがある〕Kent Street[1]（現在はOld Kent Road[2]）で、彼の馬から落ち、下腿[1]（脛骨[2]）の骨幹部の開放骨折を起こした。

彼は、随行者に指示、ドアと2本の棒を購入させ、即席の担架を作るまで、冬の鋪道で待っていた。当時の馬車は振動が激しく、患者搬送には不適当であったことによる。[1,2]

この手製の担架で、London橋からSt.Paul近くのWatling Streetまでの長距離を移動した。[1]

初診の医師は、即座に切断術を主張した。手術準備は全て整ったが、外科医Mr.Nourseが、保存的治療の可能性があると手術を拒否したため、Pottは助かった。[1]



（図：1）
Operationsstuhl im 19. Jahrhundett Victor v. Bruns Handbuch der chirugischen Praxis

脚の治療に長期間を要したが、この間に、多くの論文を発表し得た。[1,2]

当時、「開放骨折」の診断は、往々、「死の宣告」であった。切断術は、標準的処置として容認されていたが、いざ実施すると却って、予後を悪くしてしまうことも少なくなかった。[2]

Ⅱ．当時の切断術について

1785年、英国の代表的風刺画家Thomas Rowlandson（1756～1827）が、手術の状況を見事な作品で示している。[3]

Dr.Fiona Haslam女史の的確な解説[3]とともに検討したい。図解の方が、余程、理解し易いと思うからである。

1）不幸な患者または犠牲者unfortunate patient or victimを、手術椅子（図：1）に座らせる。[4]躯幹と健脚を固定して、患脚を足台にのせる。[3]（図：2）

2）術者は、左手で患側大腿を掴み、右下腿を自分の右膝で押え、固定している。上衣を脱ぎ、防護袖をつけ、大工用エプロンをつけて、切断用鋸を挽いている。

3）術者の後ろにいる解剖学者も、同じ服装をしている。

4）患者の背部から、強壮な助手が両手を押えている。

5）尾側の助手は、次に使う、メスと松葉杖を抱えている。

6）右端の内科医は、制服を着て、鬘（カツラ）をつけ、三角帽子を抱え、佩剣を帯び、威厳をつけて、手術を凝視している。

（図：2）Thomas Rowlandson：The Amputation

7）術者と患者の間にいる紳士は、手術がよく見えるように犠牲者の頭を押え、眼鏡を調節している。
8）外科医の足許の袋の中には、手術道具と一緒に、既に切断された大腿骨が見える。切断創からの出血を入れる鉢も横に置かれている。
9）後方には、屍体や、物真似をしている骨骼、当時の高名な外科医の名前が標され、右端下には胴と躯幹骨の入った桶がある。
10）この手術で駆血帯は使われていない。
Rowlandsonは故意に省略はしていない。

F.Haslamは、際限のない放血blood-lettingを続ければ、当然生命の喪失に結びつくのに、管理や予後を考える暇もないほど執刀医が急いでいたかと述べている。

何れにしても、術者を始め、この患者に関心を寄せる人がいないので「犠牲者」と言う言葉が使われたものか？

総括すると、この図は、手術室と解剖室の類似性を強調し、「恐怖による興奮」excite terrorに満ちている。

Ⅲ．Instrumentについて

1．血管結紮と駆血帯の使用

Ambroise Par'e（1510？～1590）が、1552年に切断に際し、始めて動脈など血管を結紮し[5,6]、また嘴状鉗子　becs de corbinで挟み、[7]ほとんど出血なく、良好に治癒させている。その12年後に、外科10巻（1564）で公表した。[5,6]

一方、紐を鉛筆状の木で締める方式の原始的な駆血帯が、1674年Besançonの包囲戦の時、Morellによって実施された。[7]

1678年Young of Plymouthが鉄環“garrot”を創作、Zittierが改良した。1718年Petitが始めてTourniquetの名前をつけた。[7]

その後、10種以上の改良型が発表されている。[7]

2．Pott*Messerについて

Günter Thieleは「Pottメス」について、「柄のところが中空の切断刀で、刃先きまでの距離は、腹の方が長く、手元の方が幅広くなっている」と説明している。[8]

Royal College of Surgeons of Englandが管理するMuseum所蔵の、Surgical Instrumentsの解説書がある[7]。この中に、歴史的な各国のメスの形態の変遷（図：3）や、代表的な開発者の名前があげられている。

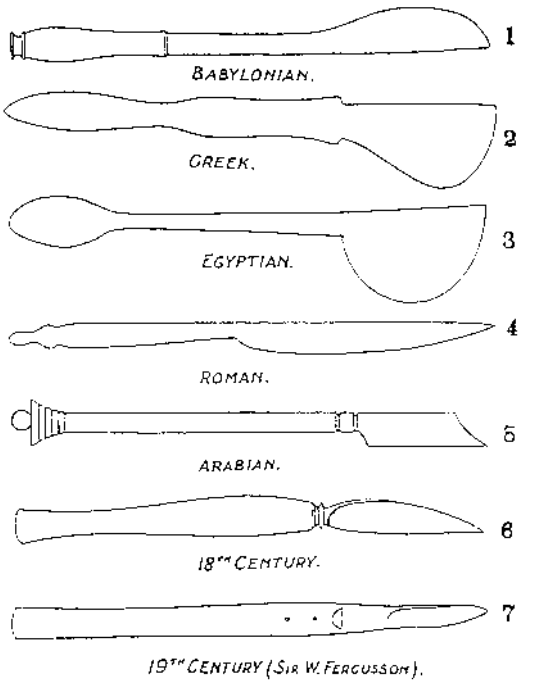
G.Thieleの解説と対比してみると、「Pottのメス」は、6の18世紀のメスに似ているように見える。（図：3）

18世紀に使用された切断刀については、Samuel S.Sharpe（1700～1788），Jacques Lisfran（1790～1847），Robert Liston（1794～1847），その他Loder（1784）．Perret（1772）などの名前があるが[7]、P.Pottの記録がないのは不思議である。

結論

Pottの切断刀は、G.Thieleによって、概略は分かったが、具体的な詳細については不明である。

Percival Pott自身が、Pott骨折でなく、下腿の開放骨折を起こして、切断寸前にまで追い込まれたことと、彼の名前のついた切断刀が果して実在するのか、不思議な因縁を感じている。



（図：3）

付図出典

（図：1）　（文献：4）と同じ
（図：2）　（文献：3）と同じ
（図：3）　（文献：7）と同じ

文献

1．Mercer Rang : Anthology of Orthopaedics.(Churchill–Livingstone,1966)
2．David Le Vay : The History of Orthopaedics.(The Parthenon Pub.Group,1990)
3．Fiola Haslam : From Hogarth to Rowlandson in Art in Eighteenth Century Britain.(Liverpool University Press,1996)
4．Helmut Vogt : Medizinische Karikaturen von 1800 biszu Gegenwart.(J.F.Bergmann,1982)
5．森岡 恭彦著「近代外科と父パレ」〔日本放送協会・平成2年〕
6．田辺 達三著「メスと手のわざの医療物語」〔中西出版・2002〕
7．C.J.S.Thompson : Guide to the surgical Instrument and Objects in the historical Series with their History and Development.(Taylor and Francir,1929)
8．Günter Thiele : Handlexikon der medizin.(Urban–Schwarzenberg,1980)

足

札幌市医師会
国立札幌病院　荻田　征美

よく人は父の背中を見て育ったとか、父の背中の大きさにその威厳を感じたとか、父親と言えば背中という印象を聞くことがある。私にとっても父の存在は人々と同じように決して小さいものではなかったが、なぜか今に至るまで父に対する印象は背中ではなく足にばかり集中している。

昭和23年に軍役後の捕虜生活を終えて父が日本に帰って来たが、その間にずうっと履き詰めであった軍靴の所為か、足の土踏まずに吹き出物がいっぱいできていた。それを父は帰国後、直ぐに道南の道立病院に勤務したが、そこで水虫として丹念に処置をしていた。と言っても、終戦直後のこと故、角質異常の部分を削ったりアルコール消毒をするだけなのであったが、その作業は毎日の日課として欠かすことなく続けられた。そのうちに、業を煮やした父は「難治性の水虫には放射線治療が効く」と唱して、こともあろうに自分で放射線をあてた。難治性の皮膚病に限外放射線をかけたという歴史的治療法は聞いたことはある。

しかし無論そんなことでは治ろうはずもなかった。症状などから今にしても考えてみると、掌せき膿疱症であったと思われる。事実、その後両手のひらにも膿疱ができていたのである。

一進一退を続けながら、昭和27年に空知の北海道で一番大きな炭鉱町の保健所へ、次いで1年後には道立療養所へと転勤して来た。その頃になると足の土踏まずには潰瘍ができており、父の日課の処置には一層時間がかかるようになっていた。

そして昭和29年になったとき、両側の放射線照射した足底部が隆起してきた。腫瘍化したと知って、初めて父は自分の力には到底及ばないと考えた。そこで大学病院へ行き診察を受けた。結果、放射線照射後の皮膚癌と診断され、両足の切断を宣告された。それでは仕事ができないと、父は必死に懇願して、何とか切断をしないで済ませてもらった。両足底部を大きくえぐり取って、所属リンパ節のある両鼠径部に放射線が照射された。これも後で考えると基底細胞癌という遠隔転移の見られないものであった。当時は有きょく細胞癌と共に基底細胞癌は皮膚癌の範疇に入れられていたので、やむを得ない治療であった。

一時全快したかに見えた足底部に小さな潰瘍がまたできて、父は相変わらずの処置をしていた。

私も大学生となり、医者になるべく勉強をしていたが、ある時、風呂上がりの父が半裸の状態で、例によって足の手入れをしていた。見ると太股や臑にはほとんど筋肉は付いておらず、ごつごつした膝の関節が目立ち、太股や臑の皮膚にはほとんど毛がなく、張りのない精気を失った皺だら

けの足が目についた。

思えば、生まれ育った大阪から北海道に渡り、やがて時代の流れに伴って大陸にまで渡って、そして家族の待つ北海道に戻って来た足なのである。長い道のりを掛けて私たちを導いてきた足でもある。筋肉を被った皮膚が張りつめて、毛ガニのような毛が生えて赤みを帯びている若い私の足とはまるで違っていた。私はあまりに異なった彼我の差に思わず父の足に触ってみた。父はにやっと笑って、「何してんね。」と大阪弁で言った。

その後、父は足の手入れから開放されることなく、78歳で亡くなった。私は、自分の仕事も忙しくなり、父のことは忘れかけていた。そして60歳の還暦を目前にした暑い夏の日に脳梗塞に倒れ、自分の勤務する病院に緊急入院した。一時は右半身が完全に麻痺したが、幸い大事に至らず恢復も早かった。発作を起こしてから2週間後には歩行訓練も始まった。リハビリの準備のため、入院ベッドから起き上がった。その時、寝巻きからはみ出した自分の足を見た。今の今まで気がつかなかったが、いつか思わず触れた父の足と全く同じであった。

スーパージイチャン

札幌市医師会
中原小児科医院　中原　孝

「ジイチャン」とテレビ電話の向こうで上田市に嫁いでいる2番目の娘が話かけてきた。

「何だ」といつも電話してくる時には娘の子供、すなわち孫が熱がある、おなかが痛い、怪我をしたとかで必ず電話をかけてきてどうしたらいいだろうかと助けを求めてくる。いつものことと思って「どうした」とそっけない返事をしたら「友太がさぁージイチャンのことをスーパージイチャンと詩に書いたみたいだよ」「へー、スーパージイチャン、何だそれ」「よく分からないけどさ」と何だか狐につままれたような話、何で私がスーパーなのか変な感じ。それ以上のことは分からない。友ちゃんが何を書いたのかその中身が知りたくて、孫の長女の李乃ちゃんに聞いてみるとよく分からないけれど百人一首がどうのこうのと言っているが、後は知らないとそっ気ない返事。仕方がないので友ちゃんを出してとテレビ電話に呼び出した。画面の向こうでにやにやと笑っている。

「友ちゃんジイチャンの何を書いたのさ。変なこと書かれたらジイチャン恥ずかしいんだからね。何書いたか教えてよ」「もう忘れちゃったよ。何書いたかなー」と涼しい顔して楽しそうにニヤニヤしている。

それからは私の心の何処かでもやもやしたものがあって、何でスーパージイチャンなのか、ガンにかかっていて健康でもないし、何か立派なこともしていないしハンディを持った生活をしているのにどこがスーパーなのか、不思議でたまらないと思っているうちに1ヵ月以上たった。

ある日「ジイチャン僕の詩が選ばれたよ。皆の前で発表されるんだとさ。また、それが音楽にもなるんだって」「えっ何、選ばれたって、それはおめでとう」と言ったものの、上の空の返事で向こうの喜びに反して私は冷静であった。ジイチャンに分かるように説明してよと言うと、上田市の小学校で1年生を除く2年生から6年生の児童より詩を募集したら、その中から3人が選ばれ、その中の1人に入ったとのことで「ほう、それはすごいぞ友ちゃん」「その発表は上田市の文化センターで7月26日、何かファミリー音楽会の席上であるんだと」「へーそうか、しかし友ちゃんジイチャンの何を書いたのか教えてよ。変なこと書かれたらジイチャン泣いちゃうよ。」「変なことなんか書いていないよ」とにやにやしている。それからというものは大変、ジイチャンは上田に行って友ちゃんの発表会に立ち会うべきだと女房をはじめ、娘たちの外野席がうるさくなってきた。恥ずかしくてそんな所に行けるか、行かないよと私も頑固に自分の意見を主張した。

しかし、ジイチャンこんな名誉なことはもう生きている間にないんだよ。この、またとないチャンスをつぶすつもりかい。友ちゃんもどれだけ喜ぶか、それが分からないのかいとうるさい外野席

に説得される。私の心もゆれにゆれてどうしようかと決断できずにいたら、ついに友ちゃんより電話があって「ジイチャン来てよ。是非来てよ」と懇願された。友ちゃんより懇願されれば行かずばなるまいと決心した。「よし、友ちゃん行くぞ」「良かった是非来てね」と電話の向こうで明るく笑っていた。

それからが大変、文化センターでは友ちゃんはたぶん壇上で発表するので私はどうすべきか。いらぬ考えが脳裏をかすめて日常生活が落ち着かない。7月26日は土曜日、診療を休むことにし、その前日上田市に向かった。

友ちゃんたちの家に泊まって当日のことが少々分かってきた。82銀行の外郭団体の82文化財団が年に1度行うファミリーコンサートが上田市文化センターで行われる。その中で今度選ばれた小学生の詩を発表し、それに曲をつけて歌にするということで、友ちゃんを含め3名が選ばれたとのことであった。中身は何であれ、でかした立派なものだとほめてやった。

当日になった。私は心中穏やかでなく、コンサートの時間が近づくにつれて緊張感でいっぱいだ。友ちゃんが舞台で発表の時に自分が何をしたらよいのか、いろいろな場面を考えて頭の中は少々パニックになっていた。

午後2時からファミリーコンサートが始まり、亀山勝子ソプラノ歌手、亀山法男作曲、ピアノ、歌の2人による楽しい音楽会が始まり、歌あり、ユーモアあふれるお話、ピアノ演奏等があり、会場が大いにもりあがった。

プログラムが進んで終わりに近づいた。これより小学生から募集した詩の中から採用された3つの詩を発表しますと亀山ソプラノ歌手が始めた。私はもう心臓どきどき、記録にとろうと思って持っていった8㎜ビデオ、写真を一生懸命とり、一方で女房にも録音もさせた。話によると上田市の小学生1年生を除く2～6年生より詩を募集したところ300余通集まり、その中から4年生女の子「おかあさん」、5年生男の子「スーパージイチャン」6年生女の子「手」の3詩を選び、その詩を作曲したとのことであった。そして4年生の女の子が舞台に呼ばれて発表会が始まった。彼女は自分の詩を読む。亀山歌手がいろいろと質問をし、会場の人々を笑わせる。次は友ちゃんかと思うと私の鼓動はもう最高潮になっていた。その子の詩が作曲されて亀山歌手が歌う。会場は大喝采であった。終わって会場が一瞬静寂になった。いよいよかと思った瞬間5年生の友ちゃんの名前が読み上げられた。舞台に上り亀山歌手にうながされて自己紹介し、詩の朗読が始まる。あっという間に終わってしまったが、初めて詩の中身が分かって感心した。

亀山歌手の質問は矢継ぎ早でジイチャンはなぜスーパーなのか、どうしてこの詩を作ったのか等、最後にジイチャンは会場にいるの。あっ、あそこにいたね。ジイチャンどうでしたかと言われ、私はただただ会釈するのが精一杯であった。その後、亀山作曲者が作曲した詩を歌って終わった。私はほっとして体から力がぬけるのを感じた。その後6年生の詩「手」は素晴らしい詩で6年生とは思えないほどであった。「手」の作曲が披露された後コンサートは終わった。

しかし、私はしばし興奮より覚めることはなかった。私は友ちゃんに記念品、女房は花束をあげて祝った。会場では私は友ちゃんの学校関係者やいろいろな方より祝福の挨拶をされ、本当に面食らってただただコメツキバッタのように頭を下げていた。私は詩からスーパージイチャンの中身が分かってほっとすると共によく私を観察し、うまく表現したものだと感心した。

その発表会が終わってしばらくして私の気持ちも平静になった。ある時、ひょっと気がついたことがあった。それは現在の老人は孫いるいないに関係なく子供との接触を試みている、あるいは試みようとしている人はどれほどおられるだろうかと。

老夫婦、一人住まいの老人は自分たちの家庭、健康を守ることに一生懸命です。誰にも迷惑かけない自立の態度は当然で立派だと思いますが、何か物足りない感じがします。子供に接する老人があまりいないのではないか、子供のために尽くしていただける老人は少ないのではないだろうか。老人は人生でいろいろと経験していることをお話をし、教え、また良い行いを見せて子供たちに良

い影響を与えることができるのではないだろうかと。

戦後、自由主義、民主主義になってそれまでの社会の形態が破壊された。新しいこれからの思想は正しく理解されず、自己責任のない自由奔放、自分勝手、無責任ご都合主義になっていったように思われます。家庭においては核家族が進み、老人の独立、若い夫婦の独立した生活はやがては子供を産んでも育て方が分からず、育児書に頼って老人に相談することなく、本の通りに育たなくて悩んでノイローゼになった若い夫婦を多く経験しております。おじいちゃん、おばあちゃんに聞けば問題が解決する簡単なことが多いのですが、しかし同居していないから聞くことができないということでした。そこには老人と若い人の間に家庭の縦の連絡がないため、若夫婦は子供の教育は自己本位で、少ない子供に溺愛し、家庭教育ができず、その結果、我儘で自己中心的で思慮分別のできない子供ができあがり、その責任が家庭にあるのにも関わらず他に責任を転与してしまう変な社会になってしまい、それが風潮になってしまった。

その責任は戦後、家庭崩壊の政治を進めた人、過去の全てを否定した人たち、正しい民主主義を教えなかった人たちと数えればきりがない。私は昔の教育勅語の中で父母に孝に兄弟に友に夫婦相和し朋友相信じという言葉が大好きである。これは家庭で人間としての守るべき基本的な法則でないかと思っておりますし、これは時代とは関係ない人間社会における基礎であり真実だと考えております。

これからの家庭はもう少し老人を含めた昔の家庭を考えるべきではないだろうか。老人も自分たちの生活のみを考えず、子供、若い人たちに関心を持ち、できるならば積極的に関わり合っていかれた方がよいのではと思う。家庭も社会も明るく、子供たちも老人の背中をみて良い方向に育っていくことを希望します。老人はもう人生が終わったと消極的な生活をせずできるだけ、孫がいるいないに関わらず子供たちに接するように心がけ、社会もそれを応援して子供たちに良い知識を与え、また良い行動を見せることによって、「スーパージイチャン」「スーパーバーチャン」が街にあふれるようになれば今の荒れた社会も少しは良くなるのではないでしょうか。

最後にスーパージイチャンの詞を紹介しましょう。私は今までに幾つかのガンを経験し、現在も治療を続けており健康ではありませんが、これからもスーパーと呼ばれるよう頑張りたい。

スーパーじいちゃん
ぼくのじいちゃんスーパーじいちゃん
そのわけは、百人一首をすべてあんきし、
しょうぎは強いしカルタも強い。
病気と戦いながらも、
働いているし遊んでもくれる。
じいちゃんわが家のカメラマン。
畑を持って畑仕事で大活躍。
何でも知ってて何でもできる。
とってもすごい、
ぼくのスーパーじいちゃん。

風呂敷包みとおばあさん

札幌市医師会
ノテ福祉会アンデルセン診療所　門脇　純一

紫色の風呂敷包みを背負い、その対角端を胸元で結んだ恰好は、久方ぶりにみた。70歳代の高齢者婦人である。今にしては珍しいこの恰好も、昭和ひとけたの私には、懐かしい感じが同居している。

かつて風呂敷は、種々のものを包み持ち歩くのにたいへん便利で、よく使用されていた。

しかし最近は、公の贈り物を包むような形として使われる以外、あまり見られなくなってきたように思う。

祭りのだしには欠かせない獅子舞いも、頸、胸腹部には緑を地に白模様をあしらった唐草の大きな風呂敷を想起させる。

外国を訪ねた時に、お土産に風呂敷を用意していったことがある。不思議そうな表情で聞いてくる外人の質問の多くは、これは何に使うものですか？　である。私は不適切な表現であったろうが、ユニバーサル・コンテイナーといった記憶がある。どうも和製英語に近い。というのは、相手にすっきりした表情が読めなかったからである。辞書を引くと、a cloth wrapperとある。大多数の外人は風呂敷を手にして、変形スカーフと理解したようである。

話は途中でとんでしまっているが、例のご婦人の風呂敷の中身は手持ちカバンで、バスセンターの椅子に座りながら、風呂敷からカバンを取り出し、そのカバンに折り畳んだ紫の風呂敷を入れた。すなわち、内と外が交換されたことになる。そのとたんに、このご婦人は今流の人に装身してしまい、私の懐かしいタイムトンネルから抜け出てしまった。

北海道医報投稿にあたって（お願い）

◇情報広報部◇

北海道医師会では、会員の皆様からの原稿を募集しております。下記の要領をご留意のうえ、ご投稿くださいますようお願い申し上げます。

1．原稿の締切

毎月1日発行：前月15日

2．原稿の体裁と字数制限

(1)　原則として横書きといたします。

(2)　引用文以外は、すべて当用漢字、現代かなづかいを使用してください。

(3)　誤字、脱字等は情報広報部において訂正いたします。

(4)　1回の掲載紙面は、原則として2頁を限度とします。

医報1頁は医報用原稿用紙（22字×11行）6枚、または市販原稿用紙（20字×20行）で約3枚半です。パソコン等を利用の場合は、1行の文字数を22字で設定してください。医報1頁は60行となります。

また、長文原稿および連載物は、情報広報部にて採否決定の上で分割掲載、掲載号等を決めさせていただきます。

(5)　できるだけメールまたはフロッピーディスクでお寄せください。

3．原稿の採否決定

内容が掲載に支障があると判断した場合は、執筆者に訂正を求めるか、または掲載をお断りすることがあります。

4．ホームページへの掲載

特にお申し出のないかぎりホームページに掲載されますので、予めご了承ください。

連絡先：北海道医師会事業第二課
TEL011-231-1725　FAX011-252-3233
E-mail：ihou@office.hokkaido.med.or.jp